

図画工作科学習指導案

4年 1組 城野 知佐

1. 研究主題

造形活動を通して育む未来そうぞうのための資質・能力

2. 題材名 「NEWアートカードをつくろう - ちょっとふしぎな顔認識システム、研究所 -」

(1) 題材について

本題材は、見慣れた校内の様々なものや場所、時には校外の身近な場所から、顔に見立てた部分を写真に収め、オリジナル顔カードをつくり、それらの顔カードを使って活動するものである。

子どもたちは、デジタルカメラなどに搭載されている顔認識システムでは認識されない、身の回りの様々な場所に存在している「顔」を探す活動を通して、今まで意識していなかったものや場所に気付いたり、今まで見ていたものでも見方を変えたりしていくことになる。この経験は、今までと同じように鑑賞の活動をする際、同じ作品でも今までとは違った発想ができるようになると考えられる。また、製作する際にも今までは気にとめなかった細部にまでこだわったり、材料や用具も新しいものにチャレンジしたりするようになると考えられる。さらに、図工の時間だけにとどまらず、普段の生活の中でも今までとは違う見方や感じ方をするにつながる。例えば、今までなら気にもとめなかったであろう、隅にはき残されたゴミに気付く、見ているようで見えていなかった友だちの困っていることに気付く、友だちのいいところに気付くなどである。以上のように、図工での活動を通して、図工のみならず普段の生活で多様性を受け入れるようになることをねらいとしている。

子どもたちはこれまで、様々な活動をしてきた。例えば、既存のアートカードを使って、共通点を見つけていく神経衰弱や、カードから自分が見つけたものや感じたことを3つのヒントにして出し合うスリーヒントクイズ、6年生がつくった読み札を使ったカルタなどである。また、作者になりきってある作品を解説したり、自分のつくった作品にオーディオガイドをつけたりしてきた。どの活動の時も子どもたちは概ね意欲的で、作品を見ること（経験すること）を楽しんで切る。しかし、活用の仕方が固定的になっていること、また、使っているアートカードが一種類であるため、「この作品はAのように見える。」といったような固定的な見方がうまれつつある。これは4年間同級生として過ごしてきた友だちの間でもいえることである。初めは新鮮に映っていた作品が「いつもの風景」と化し、見過ごしている部分が見えなくなってきたのではないだろうか。

今回の題材を通して、普段見逃しているものに気付いたり、同じものでも多様な角度から見たり、また、そこから今までとは違う想像ができるようになることで、友だちの気持ちに思いをはせたり、同じ物事でもそれぞれにとって様々な意味や価値があること、自分にとっての物事の意味や価値も瞬時に刷新されていることに気付く契機になればと考える。具体的には、気付いたことに対して、当番ではないが掃除したり、困っている友達に声をかけたり、気付いたことに対して「いいね」と言ったり、何かしらの行動を起こすことにつながればと考える。

(2) 題材の目標

身近な場所を「顔かもしれない」という視点を持って見てまわり、顔に見える部分を探す活動を通して、多様な角度から物を見たり、今までとは違う発想をしたりする活動に取り組む。

(3) 題材の評価規準

	造形への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
ける題材の活動の評価規準	①いろいろな場所から顔を想像し、見立てることを楽しもうとしている。 ②自分や友だちのものの見方を交流し合い、楽しもうとしている。	壁や扉などから顔を想像し、感情などを考えている。	顔に見えるように写真の撮り方や、切り取り方などを工夫している。	自分たちでつくった顔カードから感じたことや思ったことを話し合ったりしながら、形や色、組合せなどを手がかりに造形的なよさや面白さを味わっている。

(4) 図画工作科と未来そうぞうとのつながり

図画工作科の学習では、多様な角度から身近な場所を見たり、顔カードを見ながら今までとは違う発想をしたりすることで、子どもが「多様性を受け入れ、自分の考えを何らかの形で表現するようになる」ことをねらいとしている。このねらいに向けて、本時では特に子どもが「多様な見方や感じ方を認め合い、新たな意味や価値を創造するようになる」ことを目標にする。このことが、未来そうぞうにおける、「創造的実践力」を育むことにつながると思う。

(5) 活動構成の仮説

- 顔カードをつくったり、それらを使って活動したりする場では、多様な見方や感じ方を認め合うことができ、新たな意味や価値を創造するようために有効である。
- 最新の顔認識システム搭載のカメラを自分でつくることによって、見えるものが違うことを前提に活動が始まる。とらえられる顔は、同じ場所を歩いていたとしてもそれぞれ違う。それらの顔に間違いはなく、さらに自分には見えなかった顔を見つけてきた友だちがいると、驚き・称賛のまなざしが飛び交い、次、自分がその場所を歩いた時、友だちの目線に立って顔を探したりする活動につながる。友だちの体のあった場所に自分も身を置き、その友だちの気持ちに思いをはせることで、今まで自分にはなかったものやことを経験し、自分の考えや経験と混ぜることで新たな意味や価値を創造すると思う。

(6) 準備物

- 教師：写真撮影可能な道具（デジタルカメラ・タブレット端末など）、ラミネートシート・ラミネーター・顔カード・ワークシート
- 児童：筆記用具

3. 単元計画（5／5時間）

- 第一次 ちょっとふしぎな顔認識システムを搭載したカメラをつくる。（2時間）
- 第二次 顔を探しに行き写真に収め（授業時間外で学外も可）、カードにし、鑑賞する。（3時間）
- ①カメラ（カメラ機能）を使って写真を取りながら共有する。（図工室→校内→校外）
 - ②テーマに合った顔を探しながら、理由を考える。（New アートカードをつくろう）（本時）